

2015年8月23日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 15章 1～12節

説教：心を盗むアブシャロム

あらすじ

ダビデの三男アブシャロムは、憎しみに駆られて兄を殺し、母親の実家に逃げ込みます。王であるダビデは、一族の間に起きた深刻な事件の先頭に立って正さなければなりません。けれども何もしません。そのまま三年の月日が流れてしまいます。しかし、ひとりの智慧のある女性のことにより、ダビデは自分の間違いに気がつき、アブシャロムをエルサレムの自宅に戻すことにしました。ただ、元のままというわけにはいきません。ダビデの世継ぎであった長男を殺した罪は重大であったということで、王子としての権利は剥奪され、自宅軟禁されてしまいます。

普通ならそこで人生は終わりです。ところがアブシャロムは簡単にあきらめる人ではありません。まるで、獲物を狙う獣のようにじっとチャンスをうかがい続けます。二年経ったときに、ヨアブの畑に火をつけるという強引とも思える手段を使い、王であるダビデに謁見する許可を取り付け、そこでダビデはアブシャロムに口づけをしました。これには二つの意味があります。アブシャロムが王子の地位に戻されたこと。そして彼がダビデ家の由緒正しい世継ぎであることが公にされたということです。アブシャロムはひそかにクーデターを起こし、イスラエルの王であると国中に宣言しようと企てています。力さえあれば誰でも勝手に名乗れる訳ではありません。人々に正式な王として認めてもらう必要があります。そのためにはあらかじめダビデから認められた者でなければなりません。

アブシャロムはそれを手に入れました。そして次の一步を踏み出します。

## 1 アブシャロム

### 1) 軍事活動

アブシャロムは二つのことをします。一つ目。戦車や馬、兵士五十人を手に入れました。それなりの資金が必要です。デパートに行つて手当たり次第に高価なものを買ひあさり、その支払い請求書はすべて父親のところにまわした。そんなやりかたです。どんな父親でも、請求書を見たら息子を呼んで問いただすはず。「この金は何に使ったのか。」車を買いましたという話ではない。軍事資金に使われたのです。ただでは済むはずがありません。すぐに調査が入り、処罰がなされなければならない。そこまでなくても、怪しい行動をしているのですから、要注意人物として行動を監視させるくらいのことにはしなければならない。けれどもなにもしません。どうしてなのでしょう。

### 2) 広報活動

アブシャロムはもう一つのことをしています。ひとことで言えば広報活動です。そのために朝早く門に通じる道に立ちます。地方からエルサレムの裁判所に訴えるために上京してくる人たちに狙いを定めてこう言うのです。3節。「ご覧。あなたの訴えはよいし、正しい。だが、王の側にはあなたのことを聞いてくれる者はいない。」「ああ、だれかが私をこの国のさばきつかさに立ててくれ

たら、訴えや申し立てのある人がみな、私のところに来て、私はその訴えを正しくさばくのだが。」

ことばを語るだけではありません。あいさつしようとしている人に対してこちらから進んで出て行き、手を差し出し、その人を抱き、口づけまでする。このようにして自分をアピールします。そうしたらどうなるでしょう。この人たちは地元に戻ってこんなことを言うでしょう。「エルサレムに行ったら、ダビデのご息子のアブシャロムに手を握られてね、びっくりしたよ。話もとてもわかる人で、いやあ感激した。あれならダビデよりもすばらしい王になれる。」そんなうわさを広めてもらう。それが狙いです。彼は足の裏から頭の頂まで非の打ち所がないほどハンサムで髪の毛も豊富であったと書かれています。ことばが巧みで、悩みを親身になって聞いてくれて、スキンシップもすばらしい。おまけに顔かたちが良いとなれば、悪く言う人などいません。イスラエルのすみずみまでアブシャロムのうわさは広がっていきます。

### 3) 心を盗む

アブシャロムのしたことを聖書では次のように評価しています。6節。「アブシャロムは、さばきのために王のところに来るすべてのイスラエル人にこのようにした。こうしてアブシャロムはイスラエル人の心を盗んだ。」

心を盗むという言い方は創世記にも出て来ます。相手に言うべき事や告げるべき重大な事実があるのにも関わらず、隠して黙っているようなとき、「心を盗む」という表現をします。ここでは、人々に告げるべき重大な事実があるのに、それをアブシャロムは言わ

ずに隠していたということになります。いったい何を隠していたのか。言うまでもなく、ダビデ王を倒し、自分がイスラエルの王となる、そのことです。でも一切口にしません。ヘブロンに出かけるときも二百人に招待状を出して連れて行くのですが、皆何も知らされていません。ひとことで言えばだましたと言うことです。

ダビデは気がつかなかったのでしょうか。これだけ目立つことをしていますから気がつくはずですが、でもここでもなぜかダビデは何もしません。

### 4) 父ダビデが王となった町ヘブロン

それから四年がたったときに、アブシャロムは父のところに行きこう言います。7節。「私が主に立てた誓願を果たすために、どうか私をヘブロンに行かせてください。」かつて、自分が母親のところへ逃げ込んでいたとき、「もしエルサレムに戻ることができたら、私は主に仕えます」と誓っていたというのです。本当かどうかはわかりません。とにかくアブシャロムは、ヘブロンに行きたいと王に許可を求めました。

どうしてヘブロンなのでしょう。5章3節を開きます。「イスラエルの全長老がヘブロン王のもとに来たとき、ダビデ王は、ヘブロン王の前に、彼らと契約を結び、彼らはダビデに油をそそいでイスラエルの王とした。」ダビデが正式にイスラエルの王に就任した町、それがヘブロンでした。ヘブロンは父ダビデが王となったところです。その由緒ある町にわざわざ行きます。自分が正式な王として認めてもらうための周到な準備です。

### 5) ダビデの右腕アヒトフェルがアブシャロ

ムに寝返る

アブシャロムは、二百人のお客をヘブロンに招待して宗教儀式を執り行います。その最中にダビデの議官をしていたギロ人アヒトフェルを呼び寄せ、アブシャロムの陣営に引き入れていきます。なぜこの人なのか。ダビデと戦うことになれば、最も怖いのは誰かをアブシャロムは計算しています。それがアヒトフェルでした。相手に勝つためには、最も怖い相手を味方につけてしまうのが一番。後で出て来ますが、アヒトフェルのことばは、まるで人が神に伺って得ることばのようであったとあります。つまり天才的な戦略家です。ダビデの右腕となっていた優秀な頭脳が敵に寝返ってしまったのですから、これでアブシャロムは一気に軍事的な優位に立つこととなります。

ここに書かれていること、日本の戦国時代の国盗り合戦とほとんど変わりがありません。人間の物語として読むなら、アブシャロムは間違っていたとは言わないでしょう。しかし聖書は神の物語です。アブシャロムを通して神が私たちに何かを語ろうとしています。その語りかけが何かを聞き取らなければなりません。

## 2 ダビデから見えてくる主の姿

### 1) ダビデはなにも知らなかったのか？

アブシャロムが、まことしやかな理由を述べてヘブロンへ行きたいので許可を与えてくださいと行ってきたとき、ダビデは「元気で行ってきなさい」と送り出してしまいます。スパイ映画などで、犯人を泳がせるというシーンがあります。「元気で行ってきなさい」と言った後で、私服警官に尾行させる。それくらいすべきところ。ところが何もしま

せん。

ダビデは国中に情報網を張り巡らし、注意を怠らない人です。アブシャロムが、王位を奪おうとして怪しい行動をくり返しているのですから、当然ダビデにも報告がなされているはず。ダビデが何も知らなかったというほうがおかしい。どう考えてもダビデはアブシャロムの行動を察知し、その目的にも感づいていたと考えるべきです。ダビデが愚かな父親であったと言うことではないと思います。アブシャロムの一切を知っていながら何も手を出さなかったと考えるほうがよほど自然です。たとえその結果、自分が殺されることになったとしても、王座を奪われることになったとしても、仕方がない。そのように覚悟をしているようなのです。

### 2) アブシャロムの罪はダビデの罪

どうしてそんな覚悟をするのでしょうか。すべては12章14節にあります。ダビデがバテ・シェバとの間で不倫の罪を犯し、その罪を告白した後、預言者ナタンは言ったのです。「あなたの罪は赦された。けれどもあなたはこのことによって、主の敵に大いに侮りの心を起こさせたので、あなたに生まれる子は必ず死ぬ。」

アブシャロムは罪を重ね、父に刃向かおうとしています。でもふり返ればアブシャロムの罪はダビデのなかに元々あったものです。それがわかっているのでダビデはアブシャロムに何も言わない。されるがままにまかせます。

### 3) 主の姿

でも実はここに主の恵みがあります。二つの恵みです。一つ目。ダビデはアブシャロム

の罪は自分の罪であると感じていました。同じように、主は罪のない方であるのに、私たちの罪をまるでご自分の罪であるかのように考えてくださっていたということです。主は、しかたがたなく罪を引き受けたという消極的なことではありません。「あなたの罪はとて他人事とは思えない。あなたの罪とわたし（主）は強いつながりがある。」そのようにして罪を背負って行かれました。

そして二つ目の恵み。ダビデがそうであったように、私たちが主を十字架につけるようなひどい罪を犯したとしても、何一つ非難めいたことは口にしません。十字架でこの方は沈黙されます。その沈黙の中から、ダビデが自分の死を覚悟していったように、この方も、「死ぬべきなのはあなたではない。いや、むしろこのわたしこそ、死ぬべき者である」と語って下さいました。

この世の王となろうとした私たちをこのように受けとめて下さった主に感謝いたします。